

論文審査の結果の要旨

平成 28 年 1 月 9 日

○課程博士 論文博士	臨床教育学	(ふ り が な) 学位請求者氏名	おおみち えりつ 大道 えりつ
論 文 題 目	Significance of <i>Amae</i> as a Transitional Mechanism: Function and Role of the “Zone of Practicable Adaptability”		
審 査 員 (3名以上)			
主 査 氏 名 印	副 査 氏 名 印	副 査 氏 名 印	
河合 優年	友田 泰正	中尾 賀要子	
論 文 審 査 要 旨			
<p>本論文は、今日の発達研究におけるステージモデルに対して、日本の文化的特徴の一つとされている「甘え」という現象に現れているような、変化における移行過程こそが重要であるという、新しい理論的枠組みを提示した意欲的な理論論文である。論文の中では、これまでの発達理論を批判的に読み解き、人はどのように新しい対人環境や社会環境と適合するのかを、そこで起きている現象とそれが個体にとってどのような機能を持っているのかという視点から論考している。</p> <p>第 1 章では、発達の変化を理解するための理論的基礎について議論している。ここでは Sieglar (2002)の overlapping wave metaphor (波状モデル) を適切に引用しながら、発達のメカニズムや過程を明らかにする汎用的なモデルの構築の必要性について言及し、次項のダイナミック・システムズ理論 (Dynamicsystems theory) につないでいる。ここでは、Fogel, Garvey, Hsu, West-Stroming (2006)を引きながら、彼らが想定した移行期としてのブリッジング・フレームについて適応可能性を論じている。この後、力動的な発達モデルとして、Granott (2002)の Zone of Current Development(ZCD)と、Vygotsky(1978)の Zone of Proximal Development (ZPD)について議論を加え、これまでの発達モデルの限界についてさらに議論を深め、新たなモデルの導出につなげている。</p> <p>1 章の 4 において、それまでの発達の移行メカニズムに関する発達心理学の主要理論の概観を受けて、発達には移行の状態やそのための時間が存在し、移行期において発達を促進するメカニズムが存在すると論じ、新たな状態が定着するまで、発達の移行期に機能する中間的な段階、「可能期間」、として、二つの状態とその機能が同時に存在し、どちらの型式での行動も可能である状態を許している状態が存在していることを示した。この新しい理論枠こそ、「甘え」という「自分でやれるけど、相手をあてにすることを許す」という甘え行動の機能的な意味を説明するものと論じている。</p> <p>この仮説のもとに、社会適応的な複合機能としての「甘え」を中心におきながら、発達の移行期に機能する中間的な段階、「可能領域モデル」の構築を行っている。</p> <p>第 2 章では、日本の社会適応的過程における甘えの機能を「可能領域」という枠組みから議論し、移行期における甘えについて議論している。ここでは「甘え」についてその定義と観察される行動について言及し、「可能領域」が日本文化において特異的に存在しているとされてきた、「甘え」の機能的側面であるとする議論を展開している。これを検証するため、新しい環境への移行期である、入学などの場面で観察される行動にもとづいて、発達の場面におけるモデルの適合を検討するため、公刊された論文のメタ分析を行っている。土居健郎の『「甘え」の構造』(1971)に準拠しながら、家庭教育、幼稚園教育における日本と他文化の比較を行いながら、機能的な通底性を見出し、機能的な意味での可能期間の可能性について論究している。これらを受けて第 3 章では、このモデルで公刊された論文において議論されている事例の分析を通じて、モデルの妥当性を検討している。</p>			

第3章の、事例のメタ分析（移行メカニズムとしての「可能領域」の機能的特徴）では、臨床実践領域における研究論文において「可能領域」がどのように記述され、移行のメカニズムとしてどのような機能・役割をはたしているのかが検討された。各事例の中で記述されているクライアントの回復過程を「介入前」「介入中」「介入後」と分け、各段階で支援者がクライアントとどのように接し（問題行動にどのような対処をとり）、クライアントがどのように反応したのかを切り出している。回復過程の分類において、「介入中」を「可能領域」に該当する部分と仮定し、そこでの行動を介入前と介入後の行動と比較しながら、両段階での行動がどのように共存しているのか、どのように移行するのかについて、本論文の前半で立てられたモデルとの関連の中で検討が加えられた。

第4章は、仮説的に捉えられてきた「可能領域」が理論的にはどのような構造をなしているのか、またどのような機能を有しているのかについて議論されている。「可能領域」を許す環境は、「できる」「できない」という基準ではなく、「できるために気づきを与える」過程であり、二つの状態や機能の共存を許す環境を提供することによって、新たな変化を創出するメカニズムである。戦略的非介入(strategic non-intervention)がいつ・どのような形で用いられるかは、文化の規範によって差がみられるが、子どもの状態に応じて環境も柔軟に変化することによって、子どもも柔軟的に新しい環境に適応し、その時の自分にとって最適な行動を取ることができるのが「可能領域」の機能的特徴であり、その仕組みが普遍的な現象であると結論付けている。結論として、個体が環境との相互作用によって変化するというこれまでの発達理論に、環境の視点から移行過程に着目する「可能領域」モデルが加わることによって、AからBの状態への変化の間に、AもBも許される期間が存在し、それが個体の環境への適応度が高まるという、文化進化に通じるモデルの提唱を行っている。

論文の最終試験において、モデル検証のために用いた研究が、子どもに関するものであることから、高齢者についての適用可能性に疑義が出たが、変化の過程においては通底性があることを論理的に説明し、ディフェンスを行っている。理論論文の評価の一つの基準として、最もシンプルで基本的なモデルは最も多くの現象を説明できるというものがあるが、その視点から言うと、『ある状態から次の状態への移行は、前の状態と後の状態が混在する可能域を持つ』という、極めてシンプルな説明原理は、乳幼児から老人までの人間の発達的变化を扱えるものとして基準を満たしていると言えよう。

本論文は、甘えというこれまで日本文化に固有であると言われてきた現象の機能的な側面に言及しているため、国内外での評価を必要としている。このこともあり、論文は英文で作成された。この点もまた、本論文が、これまでの研究科の博士論文を凌ぐものとして高く評価する理由の一つである。博士論文の審査基準である、論理性、方法の妥当性、新規性、新しい研究を誘発する可能性、発信力、発想という点から評価しても、本論文は極めて高い意味を持っていると判断する。

本領域の国際専門誌の編集担当者である主査の目をもってしても、本論文が国際的なレベルを有していると評価するものである。これはまた、本学の研究レベルを内外に示すものと考えられる。

主査副査の会、博士学位請求論文審査委員会、公聴会でのディフェンス内容も十分であると判断する。これらを総合して、主査副査は本博士学位請求論文を「合」とした。